

ハンナ・アーレントの教育論における「世界の存続」：「保守性」と「革新性」という観点から

山中, 香音
九州大学大学院地球社会統合科学府地球社会統合科学専攻

<https://doi.org/10.15017/7170131>

出版情報：地球社会統合科学. 30 (2), pp.15-29, 2024-02-15. Graduate School of Integrated Sciences for Global Society, Kyushu University

バージョン：

権利関係：© 2024 YAMANAKA Kanon



論文

ハンナ・アーレントの教育論における「世界の存続」

—「保守性」と「革新性」という観点から—

The continuance of the world in Hannah Arendt's Educational Thought
: From the Perspectives of the "Conservativeness" and "Innovativeness"

2023年12月7日提出, 2023年12月18日受理

山中香音

Kanon YAMANAKA

キーワード: 公的世界、教育、文化、過去への態度、保守性、革新性

はじめに

本稿は、政治思想家ハンナ・アーレント (1906-1975) が『過去と未来の間』第5章「教育の危機」¹ (1968) (以下、「教育の危機」) で提示した、教育者の役割である「世界の存続」²について、「保守性」と「革新性」という観点から明らかにしていくことを目的としている。

アーレントの世界とは、詳細は後述するが、ここで簡潔に述べると政治的活動が行われる空間を指している。アーレントはこの政治的活動が大人のように心身が成熟してはじめて行われると考える。そのためアーレントにとって子どもは政治的活動を行う存在ではなく、政治的活動に向けて準備を行う存在である。この準備過程において教育者は子どもたちに対して世界や政治的活動が何であるかを教えるが、教育者の役割はこれだけではない。教育者は子どもたちが将来政治的活動を行えるよう政治的空間を保持する役割も担っている。アーレントの教育論における保守的な側面とは子どもの保護と、世界の保持という教育者の役割に表れている。

保守的な側面が教育者の役割の理解に見られる一方で、革新的な側面はアーレントの子どもへの理解において見られる。アーレントは子どもが「革命的」³な性格を持つと考え、世界を刷新する可能性を見ている。そのため教育者は子どもの保護においてこの革命的な性格を保護しなければならない。この世界を刷新する子どもというアーレントの理解に、アーレント教育論の革新的側面が見られる。

以上のようにアーレントは「保守性」と「革新性」の両側面が教育に不可欠であることを指摘しつつ、「教育の危機」では50年代におけるアメリカの公立学校を議論

の対象として、伝統の断絶について論じ、近代教育批判を行っている⁴。アーレントが批判対象とする近代教育は、経験を重視する子ども中心の進歩主義的教育を打ち立てた。進歩主義的教育において子どもは大人によって世界に導かれる存在ではなく、実践的学習において自ら学び成長する存在であると考えられていた。子どもの成長を子ども自身に任せるとするこの考えは、アーレントにおいて子どもを世界に導くという教育者の責任が放棄されていると批判的に捉えられた。

20世紀のアメリカでは進歩主義的教育が広がる一方で、保守主義による権威概念の復古を唱える動きも起こった。だが、アーレントは伝統の断絶を見ており、近代教育の問題を克服するためには伝統に頼らず新たな打開策を考えなければならないと主張する。アーレントのこの主張は伝統的権威の復古を目指す保守派の態度ではなく、また伝統を乗り越えようとする革新派の態度とも異なっている。

このようなアーレントの保守的とも革新的とも言える態度に関して、代表的なアーレント研究者である川崎は『過去と未来の間』では保守性と革新性が「共存」する関係にあると解釈した。このとき、保守性は全体主義によって失われた安定的秩序を再興するため過去へと目を向ける保守的側面に見られ、革新性は「進歩」ではなく新しい秩序を目指すという「革命的理論家」の側面に見られるとする⁵。この解釈はアーレントの教育論が保守的教育を唱えるものか、民主主義的教育を主張するものかというアーレント教育の研究における議論にとって先駆的なものである。では、アーレントの教育論についての研究ではこの問題はどのように扱われていたのだろうか。

アーレント教育論の代表的な論者であるゴードンは、アーレントの「教育の危機」を解釈するために、『暗い時代の人々』におさめられている「ヴァルター・ベンヤミン」(1968) (以下、「ベンヤミン」論文) に目を向け、伝統的ではない仕方でも過去を新たに語ることに着目した。ゴードンは、「ベンヤミン」論文で論じられる既存の歴史解釈に対する批判的な態度を教育者の過去への態度として捉え、民主主義的教育においてこの批判的思考を取り入れるべきであると主張した。このようにしてゴードンは近代教育論にアーレントの思想を取り入れようと試みている。教育学者の木村は、アーレントが子どもを政治的活動から切り離していることの意義について、シティズンシップ教育論者であるエルシュテインの議論を参照し、考察を行った。木村によると、エルシュテインは子どもの自我形成が政治的影響を受けていると主張し、子どもを政治から切り離し、私的領域で保護するというアーレントの保守的な取り組みを批判的に捉える。それに対して、木村はアーレントの私的領域を、大衆社会による画一化から子どもの革命的な性格を保護するための領域として捉えられると主張し、アーレントとシティズンシップ教育との繋がりを提示した。木村はゴードンの議論を補完していると言えるだろう。それに対して、教育と政治の関係について研究を行う田中は、前述したゴードンの論文では「ベンヤミン」論文と「教育の危機」の関連性の提示が不十分であることを指摘し、『過去と未来の間』の序文で論じられている時間性を手がかりにして、「ベンヤミン」論文と「教育の危機」の関連性について考察を行った。田中によると、『過去と未来の間』の序文でアーレントは現在を過去からの連続性において理解するのではなく、現在を起点として過去を思考するような時間性を考えている。そして「ベンヤミン」論文では現在を起点として過去に向き合い、これまで語られてこなかった過去を救済することが論じられている。田中はこの二つの議論からアーレントが過去を語る際に、ナショナリズムに見られるように、過去、現在、未来の連続的な時間の流れにおいて単一的物語を考えるのではなく、個々人がそれぞれの現在を起点として多様な物語を探る可能性を見ていたことを明らかにし、過去への態度における革新性を提示した⁶。田中はこのようにして、アーレントの革新性を理解するためには、過去に向きあう保守的な態度を明らかにすることが重要であると考えている。他方、アーレントの政治思想研究を行う樋口は、子どもの革命的な性格の保護について洞察を深めるためアーレントの政治的活動における「自発性」に着目した。樋口によると、近代教育では子どもたちの自発性が自然に内発すると考えられたが、アーレントにおい

て自発性は大人の導きによって現れる非自然的なものとして捉えられていた。樋口はこの自発性の「非自然性」を通して、アーレントが考える子どもの革新性を明らかにしようとしている。

ゴードンや木村や樋口のように、現代教育理論の観点からアーレント教育論の意義を読み解こうとすると、保守性と革新性は重なり合い、保守性と革新性の共存という川崎の解釈が、教育論においてはもはや維持できないものであるようにみえる。一方で現代教育理論とのつながりを超えて論じている田中のように、アーレント教育論の射程の広さを探究し、保守性と革新性を新たな視座で捉えようとする試みもみられる。

そこで本稿では前者のように現代教育理論の観点を前提とせずに、後者の取り組みに倣い、世界の存続において保守性と革新性がどのように表れているのかについて考察を行いたい。というのは、アーレントの教育論は学校教育を前提とする教育論を超えて、文化論的な広がりを持っていると考えるからである。そのため本稿では、アーレントの『過去と未来の間』第6章「文化の危機—その社会的・政治的意義」(以下、「文化の危機」)も視野に入れて、アーレント教育論の射程の広さを検討し、アーレント教育論における「革新性」と「保守性」を捉え直す。「教育の危機」では公的世界が「人格」と「作品」に重きを置く世界として簡潔に提示されるが⁷、樋口が指摘するように、これまでのアーレントの教育論解釈では政治的行為つまり「人格」に焦点を当てており、「作品」にはあまり関心を向けてこなかった⁸。こうした中で、近年においてはバーコヴィッツが「文化の危機」における趣味判断能力を取り上げて、「作品」に焦点を当てていることは注目されるべきだろう⁹。本稿は「人格」のみならず「作品」の方にも注目し、「文化の危機」と結びつけて「世界の存続」を論じることで、そこに含まれる「革新性」と「保守性」の意味を新たに解釈する。

本論では次のように議論を進めていく。第1節では、『人間の条件』を主に参照し、アーレントにおいて世界の存続がどのように考えられているのかについて見ていき、教育者の役割を検討する。第2節では、「ベンヤミン」論文だけでなく『過去と未来の間』第2章「歴史の概念—古代と近代」(以下、「歴史の概念」)も参照し、過去に重きを置く保守的な態度について考察を行なう。第3節では、「ベンヤミン」論文で論じられる事物の収集と類似した議論を行う「文化の危機」を参照する。この着眼点はすでにアーレント研究において提示されているが¹⁰、ここでは世界の存続という観点から過去の事物を気遣う精神である「文化的精神」について論じ、制作物の保護と世界の存続との関連性について考察を行なう。

1. 教育における過去の重要性

本節では、教育者の役割の一つである「世界の存続」を検討するために、「教育の危機」(1968)と『人間の条件』(1958)を主に参照しながら、アーレントが教育において過去に与えた意義について説明を目指す。そこで本論では、世界の特徴や子どもと世界の保護について論じていながら、アーレントの教育論における「革新性」と「保守性」という性格がどのように表れているかを見ていくこととする。

1-1. 公的世界について

アーレントは学校を「自分と家族を囲む公的な世界と接触するようになる最初の場」¹¹として理解する。この学校の特徴についてアーレントは、家族など親密な人々の間に生じる「私的領域」、平等な市民が存在する「政治的領域」、そして近代以降その両者の間にまたがるようにして拡大してきた「社会的領域」という三つの領域区分を用いて論じている。家族が属する私的領域は住居のように世間の目から隠されている空間を指しており、子どもたちの生命の成長はこの領域に属している。他方で社会的領域は近代以降に生じた新しい領域であり、政治的領域と私的領域が混在した空間である¹²。この領域において人々は、所属する集団の一員として他者に認識されるよう活動する。アーレントは学校を社会的領域に属するとし、それ自体としては完全な公的世界ではないが、公的世界を代表する場として位置づけている¹³。政治的領域では「平等」¹⁴という原則に従って人々は活動を行うが、アーレントは学校を社会的領域に置くことによって、子どもを政治的世界から切り離すべきであると考えた。子どもが何よりもまず心身において成長しなければならないからである。そのため、子どもたちは私的領域においては親によって、社会的領域においては学校とそこで働く教育者によって教育を受ける。学校と教育者の役割とは、革命的な性格をもつ子どもたちを守り、子どもたちが将来政治的領域で活動できるように配慮することである。

学校や教育者は革命的な性格を持つ子どもを政治的領域に送り出す一方で、保守的な側面ももっている。それは世界の保護に関する議論で見られる。はじめに述べたように、教育者の役割は世界の存続であり、それは子どもの保護だけでなく、世界を保ち続けることでもある。教育者はそのため「世界をあるがままに受け止め、もっぱら現状を維持しようとするこの保守的態度」¹⁵を持つ。教育者は子どもたちに公的世界とは何であるかを伝える

ため過去へと向かうのであり、子どもを導くためにはこの過去に重きを置く態度と教育者の権威が不可欠であると考えられていた。アーレントはこのように、世界の保護という役割が過去を重視する保守性という性格を持つと考える。

アーレント教育論における世界とは、私的領域ではなく政治的領域を指しているが、学校のように社会的領域も公的世界に関係する領域として考えられている。アーレントは『人間の条件』で公的世界を「わたしたちがやってくる前から存在し、私たちの短い一生の後にも存続するもの」¹⁶として論じる。アーレントにおいて公的世界とは人間によって構築される世界であり、人間が関与しなくても存在する自然世界とは異なる世界として考えられている。この人工的な世界は『人間の条件』において人間事象と製作物という二つの観点から論じられている。

まず人間事象についてみていこう。アーレントは人間事象の領域を「人間が共生しているところではどこでも存在している人間関係の網の目から成り立っている」¹⁷と論じる。アーレントは存在と現れとを同一視し、公的世界において存在者や出来事は他者から認識されなければならないと考える。人間事象はそのため人々が「共生」しているところに現れる。アーレントの共生は「机の周りに座っている人々」¹⁸と表現される。この喩えは人々が各々のパースペクティブにおいて同一の事物を見ているという状況を表している。人々は自身が見て、理解した対象について伝え合い、共通認識を構築していくことで、はじめて同一の対象を見ていることに確信を持つことができる。このように人々は自身の意見を提示し合い、他者の意見を理解することで共通世界を築いていくのだが、ヴィラが論じているようにアーレントはこの意見の表明を「政治的生活の核」¹⁹として考える。

この共通世界において人々の結びつきは「網の目」と比喩的に表現される。この網の目では個人の行いや人生が伝記のように物語化されるが、この物語化によって新たな網の目が既存の網の目に付け加えられていく²⁰。人間事象における世界の存続とはこのように、物語化によって古い網の目に新たな網の目が付け加えられていくことであると考えられている。

次に制作物について見ていこう。制作物は、前述した共通世界の構築において必要とされる客観的な対象物として示されている。アーレントは制作物と公的世界の関係について次のように述べる。

誕生と死が前提においている世界は、絶え間ない運動のうちにあるのではない。世界は、それが持つ耐久性と相対的な永続性によって一人の人間が世界に

現れ、去った後も存在し続けることができるように、現れることと去ることを可能とする²¹

「絶え間ない運動」とは種としての人間が絶えず生死を繰り返していることを指しており、「誕生と死」というのは個人の人生の始まりと終わりを意味している。「絶え間ない運動」において人の生死は生物学的原理の一部でしかないが、アーレントは一人ひとりの人生に意味を見るため、世界を生物学的原理に抗う安定的な場として考える。この世界の安定化をもたらす特性が「耐久性」と「永続性」であり、これらの特性は制作物の性質を指している。アーレントはこのように公的世界が制作物の安定性によって支えられていると考える。

ところでアーレントは制作物を使用対象物と文化対象物という二つのカテゴリーに区別する。使用対象物は机や椅子のように使用目的を持つ制作物である。この使用対象物は耐久性と持続性という特徴を持つ。このとき永続性は、使用対象物を制作するためのモデルにあると考えられている。このモデルの永続性は、たとえ机が壊れても新しく机を制作することができるように、繰り返し使用対象物を生産することができることに表れている。他方で、文化対象物は芸術作品が例に挙げられており、使用対象物とは異なって事物それ自体が永続性をもつと考えられている。そしてアーレントは、使用対象物の永続性がモデルであったのに対して、文化対象物の永続性を「意味」において理解し、次のように論じる。

意味というのは、それが達成されようと達成されまいと、もしくは人間に発見されようと発見されずに見逃されようと、永続的でなければならないし、その性格をなにか一つ失ってはならない²²

文化対象物の永続性を決定づけているのは事物それ自体の意味である。だが、この引用文で述べられているように、文化対象物の意味は常に発見されるわけではない。アーレントによると、事物を制作する工作人はこの意味を考えられないという。工作人は制作物を手段一目的連関において理解する。この連関において制作物はある目的を達成するための手段として見られ、その物の価値は有用性や有益性という基準において判断される。この手段一目的連関は、木材とするため木を伐採することを正当な行為として見なすように、制作過程においてはどのような手段をも正当化する。工作人の制作活動はこの手段一目的連関によって成立するのであって、工作人はこの連関から離れることができない。では、文化対象物の意味は誰が発見するのだろうか。そこでアーレントは事

物の意味が政治的行為によって発見されると考える²³。工作人は手段一目的連関によって制作し、行為者は文化対象物そのものの意味を発見する。このように制作活動と政治的行為は互いに協力し合い、文化対象物を保護していくのである。

以上のように、「教育の危機」では公的世界が人格と作品に重きを置く世界として示されていたが、『人間の条件』を見ると、公的世界は制作活動と政治的行為によって構築されており、これら二つの活動は世界に新しいものを付け加えていくことを通して、世界を存続させていると考えられていることが明らかとなった。本項では、子どもが学校において出会う公的世界の特性について『人間の条件』をもとに論じた。次の項では教育者の役割に戻り、教育者がいかにして世界の存続という役割を果たしているのかという問いについて見ていこう。

1-2. 世界の存続という教育的役割について

アーレントは教育者の役割を次のように論じている。

誤解を避けるために述べておくが、私にとって保持するという意味での保守主義は、教育活動そのものに根ざしており、教育者の務めはつねに或るもの一世界に対しては子ども、子どもに対しては世界、古いものに対しては新しいもの、新しいものに対しては古いもの一を大事にし、保護することである²⁴

世界にとって子どもは「新参者」²⁵であるように、子どもにとって世界は古いものである。教育者はこの古さと新しさの間に位置づけられており、古いものと新しいものという相反する関係を保つ役割を担っている。

この子どもの「新しさ」は『人間の条件』で詳細に論じられている。『人間の条件』では最も基本的な前提として、一人ひとりが唯一無二の存在であるという考えがある。前項で述べたように、政治的行為は人間事象や制作物を現前化させるのだが、そのために人々は自身の立場から世界について他者と議論を交わしている。アーレントによると、この議論からなる政治的行為が「自分が誰であるか」を積極的に示すことで、「唯一性uniqueness」が現れる²⁶。この「唯一性」が現れるためには、新参者は自分が「何者what」であるかではなく、「誰who」であるかを他者に認識されなければならない²⁷。政治的行為によって露わになるこの「誰who」こそが「教育の危機」で論じられた「人格」を指している。

アーレントは新参者が世界に与える影響を次のように捉えている。

人間が活動する能力を持つという事実は、本来は予想できないことも人間には期待できるということ、つまり、人間はほとんど不可能な事柄をなしうるということを意味する。それができるのは、やはり人間は一人一人が唯一の存在であり、したがって、人間が一人一人誕生するごとに何か新しいユニークなものが世界に持ちこまれるためである²⁸

アーレントはこのように唯一性を強調し、世界において革新的な変化が起こることを期待する。この期待は、「教育の危機」においてアーレントが子どもを革命的性格を持つ存在として見ていることにも表れている。

アーレントは、教育者が子どもたちの革命的性格を保護し、公的世界に子どもたちを導く際に注意すべきことを次のように論じる。

教育と政治に関して最後に一言述べたい。子どもたちに将来の精神を教え込むことによって世界を変えることができるというアイデアは、古代からずっと政治的なユートピアの顕著な特徴の一つであった。このアイデアの難点は常に同じだった。子どもたちを両親から引き離して、国の制度のもとで育てるか、学校で洗脳して両親に背を向けさせるかのどちらかでなければ、成功の見込みがないのである²⁹

アーレントは、子どもたちに「将来の精神」つまり大人となってから公的世界で活動するための精神を教えることを、ユートピア思想の特徴として捉え、それを批判する。教育者が子どもたちを世界に導くとき、教育者は理想とする世界や、理想的な世界に必要な変革を子どもたちに教えるのではない。世界がどのように変化するかは、子どもたちの革命的性格に拠っている。そのためアーレントは「教育の危機」でも、教育者が子どもたちの「性格の特質」や「才能の自由な発達」を妨げてはならないと論じ、強調する³⁰。

このように、子どもが公的世界で活動を始めるまでには、子どもの成長を保護することと、子どもを公的世界に導き入れることが必要になる。教育者の役割は、この両方の働きにおいて世界を保護することである。この役割を果たすためには政治的行為の特性を理解しておかなければならない。アーレントによると政治的行為は、世界の安定化を脅かす潜在的な可能性を持っている。アーレントは政治的行為に見られるこの性格を「一切の制限を解き放ち、一切の境界線を突破するという固有の傾向」³¹と表現する。この傾向性は政治的行為が網の目において

行われることに起因する。網の目では「無数の意思と意図」³²が混在しているため、一つの政治的行為は次の行為を誘発し、連鎖的に際限なく新たな政治的活動を引き起こしていく。このような傾向性を持つ政治的行為には、行為の結果を予知できない「予測不可能性」³³と、行為を取り消すことができない「不可逆性」³⁴という性質がある。自身の行為が意図しないかたちで過ちとなったり、悲惨な出来事を誘発したりするといった問題は、政治的行為におけるこれら二つの性質が関係している。このように、政治的行為におけるこれら二つの性質や傾向性は、公的世界を不安定な状態へと陥らせる可能性を秘めている。教育者は公的世界の安定化を図るため政治的行為の有するこの問題に対応しなければならない。アーレントが「教育の危機」で論じた、世界の存続において重要である世界の「成り行き」に対する責任は、この問題に対処する責任を意味している³⁵。

以上のようにアーレントは、子どもたちの保護を通して世界に革新的な出来事が生じることを期待するが、他方で政治的行為における潜在的な問題性も見ていた。前項では政治的行為が事物の意味や出来事を現前化させ、公的世界を構築することについて論じたが、本項では政治的行為が世界を不安定化させることについて見てきた。公的世界において人々は政治的行為がもたらす不安定さに備えて意識的に安定化を図らなければならない。この安定化のために教育者の「現状を維持しようとする」保守的な態度はこれまで容認されてきたと考えられる。そして、従来の教育では、この世界を保持するという態度を正当化するために権威が用いられてきた。だが、アーレントは20世紀においてこの権威が喪失されたことと捉えただけでなく、伝統の断絶により権威概念の復古も不可能であると考えていた。

1-3. 権威の喪失

アーレントは伝統の断絶において権威の喪失を認識し、教育的権威が何であったのかについて考察することによって、現代教育が直面する問題を検討している。

アーレントは『過去と未来の間』第3章「権威とは何か」において、教育的権威について論じている。権威 *auctoritas* は、古代ローマにその起源が見られ、「増加させる *augere*」³⁶ という動詞に由来して誕生した。古代ローマでは教育者の権威が政治的機能を果たしていた。古代ローマの人々にとって新しい政体の創設は一回きりの出来事として考えられており、古代ギリシアのポリスのように別の都市に移すことは考えられていなかった。権威が認められた人々は元老院や「父たち *pateres*」³⁷ であり、

彼らは創設行為を通して都市を「増加」させた。権威ある者たちの政治的行為は模範として記録され、後世において人々の政治的行為の基準になった。このように古代ローマにおいて政治的行為は過去から学び、模倣することを意味していた。そして、この過去への態度は伝統によって受け継がれていたのである。

アーレントは20世紀の教育においてこのような権威と伝統の復古不可能性を認識したが、それに対して、アメリカでは進歩主義的教育に対抗して権威概念の復古を目指す保守主義的教育の活動が見られた。アーレントによると、進歩主義者は近代以前の教育に対抗するため世界の保持という伝統的な保守的態度を克服しようとしたが、進歩主義を批判する保守主義者はその保守的態度を守ろうと権威概念の復古を唱えた。アーレントは過去に重きを置くという教育の保守性を認めるが、伝統の断絶を見ていたため伝統に頼らない仕方でも過去に向かう態度を捉え直すことを試みる。

そこで、アーレントは近代教育の問題を二つの観点から解釈し、教育問題の整理を行っている。一つは近代教育の問題を近代社会の問題として捉える見方がある。アーレントは近代社会に「世界疎外」を見ており、これが近代教育に影響を及ぼしていると考え、近代世界において、活動的生の内部ではヒエラルキーの転倒が生じ、下位にいた労働活動が最高位へと位置づけられた。この転倒によって、人々の生活は労働活動の性格である余剰生産と消費のサイクルにおいて考えられるようになり、このサイクルの維持という観点から生活の質が問われるようになった。近代世界では教育もまた、効率的な知の生産という観点から考えられていた。アーレントは政治的行為によって世界疎外が克服されると考え、世界疎外を教育の範囲を超えた問題として理解する。

一方で、教育的問題として捉える見方もある。アーレントは権威概念の起源へと遡り、教育が本来過去に重きを置く態度をもつことを見た。だが、アーレントが見た現代教育では世界を保持する責任が放棄され、過去に向き合う権威ある態度が失われていた。そこで、アーレントは「教育の危機」で、教育者の過去に向き合う態度を見直すことを主張する。アーレントのこの主張は伝統的な概念の復古を目指さないという点で保守主義者と一線を画している。

これまで見てきたように、教育者は世界を存続するため子どもの革命的性格を保護し、世界を保持する役目をもつ。世代を超えて存続する公的世界では、政治的行為や制作活動によって新たなものが付け加えられ、不安定な状況に陥らないよう配慮されていた。教育者による世界の保持は、この世界を安定化することにおいて考えら

れている。だが、現代教育においてアーレントが見た問題は、この世界の安定化への責任が権威の喪失とともに放棄されているという事態であった。権威の復古は不可能である。そこでアーレントは、伝統に頼らない仕方でも過去へと向かう態度を見直すべきであると主張する。このようにして、アーレント教育論において過去の重要性が浮上するのである。

2. 過去への態度について

過去に向き合うことの見直しという問題をアーレントは、前述したように「ベンヤミン」論文において取り組んでいると言えるだろう。そこで本節では、いったん教育論を離れて、2-1. では「歴史の概念」を、2-2. では「ベンヤミン」論文を参照し、過去に重きを置く保守的態度の特徴について考察を行う。

2-1. 歴史と時間性について

「歴史の概念」でアーレントは、古代と近代の歴史が「生命を不死とするか、世界を不死とするか」という「伝統的な二者択一」において考えられていたと論じる³⁸。

アーレントによると古代の歴史は、ローマがギリシアの自然概念を受け継いだところに誕生した。古代において不死性は自然的経験において発見された。自然や動物が種として存在する円環的時間において不死性が考えられたのである。この発見は人間の特徴が可死性であるという考えに至った。このとき人間は直線的时间において捉えられるからである。自然は人間の記憶を頼ることなく常に存在するのに対し、人間の行いや言論は儂いものであるため忘却の危機に瀕している。歴史は、人間の行いや言論の儂さから偉大さという「普遍的なgeneral」³⁹意味を救出し、可死性を乗り越えるため必要とされた。古代の人々にとって、この普遍的な意味は人々が与えたものではなく、自ら現れるものとして捉えられており、その普遍的な意味は言語化によって救出されると考えられていた。古代の歴史はこのように人間の可死性を乗り越えて存続する普遍的意味を求めたことで誕生し、ここに古代の人々における自然の不死性つまり「世界」の不死への関心が見られる。

だが、近代に入ると科学の台頭とデカルトの懐疑によって人間事象への理解が変容する。近代以前では思索を通して宇宙や自然の真理は明らかになると考えられてきたが、近代科学の誕生により人間の感覚では客観的な自然を認識できないという考えが生じた。近代哲学はデカルトの懐疑から自己の精神が認識することだけが確か

なものであるという考えを引き継いできた。近代の歴史もこの影響を受けている。アーレントによると、ヴィーコに代表されるように、歴史は人間によって作られるため、人間が把握できるものとして考えられた⁴⁰。そしてヘーゲルが歴史を人類の「包括的過程」⁴¹として考えたことで近代の歴史は完成した。このようにアーレントは近代の歴史観を解釈し、近代の歴史では人類の不死性つまり「生命」の不死への関心が見られると理解した。

アーレントによると現代の歴史は、際限なく広がる過去と未来という時間性と人類の不死性への関心という近代の歴史観を受け継いでいるという⁴²。不死性を求める歴史的意識は、1-1. で述べた世界の永続性を要求するアーレントの議論においても見ることができるだろう。だが、アーレントはこの永続性を世代を超えて行われる政治的行為に見ているのであって、古代のように円環の時間にその永続性を求めるのではなく、また近代においてヘーゲルが世界精神を唱えたように歴史の過程にも求めている。このようにアーレントの歴史には、近代や古代の歴史とは異なる新たな歴史の探究があると考えられるだろう。

世代を超えて続く政治的行為についてアーレントは『過去と未来の間』の「序文」でも触れている。ここでアーレントは政治的思考について論じ、この思考活動が新しい世代に受け継がれることを期待する。政治的思考は物理学の「力の平行四辺形」⁴³という喩えを用いて説明される。この喩えでは、過去と未来が衝突する点が現在であり、そこから伸びる対角線が思考活動であると考えられている。アーレントが新しい世代に伝えようとしていることは、思考の始点である現在を自ら決めて思考活動を始めることである。アーレントは、このように思考活動の内容ではなく思考活動それ自体について論じ、各個人が「力の平行四辺形」の思考を始めることによって、公的世界において多様な解釈が生じることを期待する⁴⁴。『過去と未来の間』の「序文」で触れられているこの政治的思考は、アーレントが自ら新しい世代の人々に対して示した政治的行為の一つであるが、ここでの過去への向き合い方は、前節で取り上げた教育者が子どもたちに伝えるべきことについて論じていることとつながると言えるだろう。

以上のように、アーレントの過去への向き合い方は、歴史概念を捉えなおし、過去と未来が衝突する現在から、新たな思考活動を始めることであった。そしてそれは公的世界に対する様々な見方を発見し、語ることへと繋がっているのである。

2-2. 過去を新たに語ることについて

この項では「ベンヤミン」論文を参照し、過去への態度と事物の救済の関係について見ていく⁴⁵。アーレントはベンヤミンが伝統の断絶を認識し、過去を新たに語る方法を考えたとして積極的に評価する。アーレントによると、過去を伝達することは、伝統の断絶を気に留めず現状に満足する人々の「心の平和」に対して動揺を与える。ベンヤミンはこの動揺させる能力について考え、引用文にその力を見た⁴⁶。

一般的に引用文は学術的叙述において意見の提示や根拠となる文献の提示のために用いられるが、ベンヤミンにおいてこのような引用は考えられていない。ベンヤミンは言葉を引用することと言葉を名で呼ぶことを同一視する⁴⁷。名で呼ぶことは言葉以前の核なるものに言語をあてることで、その核なるものを現すことである⁴⁸。引用は言葉が置かれていた連関を破壊することでその言葉の核なるものを救い出し、それを新たなテキストの構造に入れて現出させる。このようにベンヤミンは引用が「保守する力ではなく浄化する力」と「連関からもぎ取り破壊する力」をもつと考えた⁴⁹。

このように、引用によって言葉以前の核なるものを新たに現し出すことは、過去を新たに語る方法でもある。この過去を新たに語ることを可能とするのが、詩的思考である。詩的思考とは感覚によって認識される事柄を隠喩において思考するということである。この思考は核なるものに「物質的な形態を与える」だけでなく、「体験可能なもの」とする⁵⁰。アーレントは、「こうした思考（詩的思考―山中）は現在に触発され、「思考の断片」を過去から引き離して、自分自身の周りに集めることによって初めて機能する」⁵¹と論じている。ここで、この詩的思考と事物の収集活動との関連性が明示されている。

アーレントはベンヤミンの収集活動を「人間の救いを補うべき事物の救い」⁵²と評価する。ベンヤミンは収集活動が事物を本来の機能性から切り離し、その事物と共属すると考えられる事物たちを一つの空間に集める活動と考えた。そこでは収集家が事物たちの類似性や時代的順序などを明らかにしながら一つの「百科全書」⁵³を作り上げていく。このようなベンヤミンの考えを受けてアーレントは、この収集活動において事物が有用性や使用価値という基準ではなく、固有の価値という基準において収集されると論じている。収集とは当時、「流行遅れ」と見られていたが⁵⁴、ベンヤミンが見出したように、アーレントもそれを現代的な活動として捉える。伝統が断絶する以前では収集家は自ら思考の断片を探して収集していたが、伝統の断絶によって過去の事物は他の事物との

意味連関から切り離され、瓦礫の山となって積み上がっている。そのため現代において人々は瓦礫となった過去の事物から固有の価値を持つ事物を見つけ、過去を救済できるのである。このようにアーレントは、ベンヤミンの着想をもとに、伝統の断絶において瓦礫となった事物を救済することが新たな過去の発見に繋がると考えた。

本稿ではアーレントのベンヤミン理解の妥当性について検討することはできないが、アーレントが論じるベンヤミンの過去の救済が、アーレントの世界の存続に関連していることを見ておきたい。前述したようにアーレントの政治的思考は現在を起点として、公的世界について思考する活動であり、ベンヤミンの過去の救済も現在を起点として新たな過去を発見する活動である。アーレントはベンヤミンの思想から、過去を新たに語る方法を発見するが、この発見は複数の人々からなる公的世界において、人々が世界について多様な理解を生み出すことに繋がっていると言えるだろう。過去に重きを置く態度は、このように受け継がれてきた世界をより鮮明で豊かに理解するものと考えられている。このようにして、過去について語ることは過去を単に保持することではなく、そこに潜んでいた世界を理解する可能性を発見することにつながるのである。

本節ではアーレントの歴史や思考、そしてベンヤミン理解を参照し、過去に重きを置く彼女の「保守性」の特徴を検討してきた。「歴史の概念」では近代や古代の歴史的意識の復古ではなく、新たな歴史の見方が示唆されていた。また、『過去と未来の間』の「序文」の政治的思考や「ベンヤミン」論文における過去のものについての理解では、公的世界の新たな側面を見る可能性が論じられていた。これらの考察から、アーレントの「保守性」は、受け継がれてきた公的世界への理解を深めるため新たな過去を発見するという特徴をもつと言えるだろう。アーレントはこのようにして、伝統を重視する保守主義とは異なる保守的態度を考えているのである。

3. 制作物の保護における教育的意義

世界の保持のためには、前節で取り上げた歴史の新たな見方とともに、制作物の保護も重要である。この論文は「ベンヤミン」論文においてあまり論じられていない。そこで本節では「文化の危機」を参照し、制作物の保護と世界の存続の関係について考察を行っていく。

「ベンヤミン」論文でアーレントは、事物の収集基準は有用性や使用価値ではなく、事物の固有の価値であると論じた。この判断基準について、「文化の危機」でアーレントはカントの美的判断能力論に依拠しながら、考察

を行っている。これら二つの論文の関連性について検討するためには、アーレントの思想的変化も視野に入れながら、カントとベンヤミン、そしてアーレントの思想的関係を明らかにする必要があるが、その究明は別稿に譲り、「文化の危機」が有する教育論への示唆を、制作物の保護という観点から考察する。

3-1. 「文化的精神」について

「文化的精神 *cultura animi*」⁵⁵は過去の事物を気遣う精神という意味であり、キケロによって生み出された言葉である。キケロは文化的精神について『トゥスクルムの荘対談集』で「魂の耕作とは、哲学のことである」⁵⁶と論じている。アーレントは、この文化的精神という言葉が古代ギリシアの教養 *paideia* を翻訳するため案出されたと理解する。

アーレントは、古代ローマの文化的精神には古代ギリシアにおける美の感受性が見られるとし、トゥキディデスの『戦史』を参照し、この美への感受性が政治的なものであったと主張する。トゥキディデスの文言—「我々は質朴のうちに美を愛し、柔弱に墮することなく知を愛する」⁵⁷—は古代ギリシアの徳について考えられたものであるが、アーレントはこの言葉を「我々は政治的判断の枠内で美を愛し、柔弱というバルバロイの悪徳の枠外で哲学する」⁵⁸と訳した。この翻訳を通してアーレントは、美への感受性がポリスの範囲内に限定されていることや、政治的範囲を無視して美を愛することが「野蛮」と考えられていたことを発見した。

この美の感受性は趣味という活動様式のため必要とされるが、それは単に個人的なものではなく、他者の存在を想定したものである。アーレントはカントの美的判断能力に依拠しながら趣味について議論を展開する⁵⁹。趣味判断能力は自己への関心—生命への関心や道徳への関心—から離れることで、世界にどのような事物が現れるべきかを決定する能力である⁶⁰。自己への関心に基づく判断能力が、ソクラテスにおいて見られるように、一者内二者における思考過程として現れ、理想とする自己を維持するため用いられる一方で、自己への関心から離れる趣味判断能力は、他者の立場から思考し、他者にとって妥当性のある判断を下す。人々は他者からの合意を想定したうえで判断を下し、他者とその判断について議論を行うが、このとき人々は同意を強制的な力によって獲得するのではなく、相手に「請い求める」までにとどめる。趣味判断能力には他者を尊敬するという性格があるからである⁶¹。アーレントが「文化の危機」で文化的精神や美への感受性、趣味判断能力について論じるとき、

そこでは事物や他者に対して慈しみ、気遣うという態度が考えられている。

前述したように、古代では出来事や行いの意味が「それ自体でおのずから顕わになる」と考えられ⁶²、事物にも「過去それ自体がもつ証言の力」があると理解されていた⁶³。アーレントはこのことに倣い、文化対象物の総体について次のように論じている。

間違いなくここで重要なことは、芸術家の心理状態をはるかにしのぐ事柄、すなわち文化的世界の客観的地位の問題である。この世界は書物、絵画、彫像、建築物、音楽といった感覚でとらえうる事物を含む限りで、諸国、諸民族、究極的には人類において記録された過去全体を包み込み、それを証言する⁶⁴

ここで述べられているように、文化対象物は過去を想起させるものである。この引用文において例に挙げられる作品のジャンルは、一般的に高尚文化に属すると考えられているが、アーレントは伝統的な価値を持つ事物だけを文化対象物として見ているわけではない。アーレントによると、天幕はゲル（移動式住居）を設置する際に用いられる使用対象物であるが、この天幕を機能性から切り離し、事物それ自体に意味を見るとき、天幕は使用対象物ではなく文化対象物として解釈されるようになる⁶⁵。アーレントの文化論における独自性は、ごく普通の生活で用いられる使用対象物を文化対象物とみなすところにある。文化対象物と使用対象物という区別は、事物の本質を決定するために用いられるのではなく、事物を多様な視点から理解するために用いられている。使用対象物は物の機能性の観点からみた事物であり、文化対象物は機能性を離れた物の実在を表す。いずれも、過去の記憶が保存されている。このようにアーレントは「文化の危機」で制作物と過去との繋がりを理解しているのである。

以上のように、文化的精神は文化対象物や使用対象物を公的世界の範囲内で気遣う精神を意味していた。文化的精神によって保護された過去の事物たちは、過去の記憶を保管し、世界を構築する制作物となる。そして、いかなる事物を保護するかを決めるのが判断能力である。アーレントは、世界の保護という視点から、過去に制作された作品の価値をそのまま受け継ごうとするわけではない。世界を保護するためには、他者を尊敬しながら、文化対象物を判断し直さなければならない。ここに伝統の保護を唱える保守性とは一線を画するアーレントの姿勢を見ることができるのである。

3-2. 文化と娯楽について

本項では、制作物の保護と世界の存続の関係に対して文化的精神がどのように関わっているかについて見ていく。

アーレントは「文化の危機」において工作人と政治的行為者の関係について論じ、世界の存続における文化的精神の重要性を主張する。先述したように、工作人は作品の意味を他者に認識してもらうため政治的行為を必要とする。他方で、政治的行為は人間事象を忘却から守るため記憶を保管する文化対象物を必要とする。このように、制作活動と政治的行為は世界を構築するため相互に依存し合う関係にあると言えるだろう。

だが、これら二つの活動は相容れないところもある。工作人は世界について思考するために独自の空間を必要とする一方で、行為者は他者との交流の場を必要とする。二つの活動は世界に関心を持つ点で共通するが、世界での活動の仕方においては対照的である。そのため両者が互いに干渉しようとする、対立関係が生じるのである。

古代ギリシアではこの対立関係は維持されるべきと考えられていた。アーレントはこの考えに倣い、制作活動と政治的行為が世界において適切に活動を行うため、この重要な関係をいかに維持するのかを考えた。ここで浮上するのが文化的精神である。過去の事物を気遣う文化的精神は、アーレントによって「美が基準となる現れの世界を慈しみ、気遣うことができるような十分に修練され洗練された精神」⁶⁶と言い換えられている。その特質をアーレントは、キケロの文化的精神における俯瞰的に物事を見る能力に求める。アーレントによると、この能力は真理など絶対的なものに見られる強制力を拒み、内的自由を獲得した精神状態によって成り立っている。アーレントはフマニタス研究者であるプファイファーやホルダーの研究を通して、文化的精神が文化対象物を介し、世界について考えることで養われると理解した⁶⁷。制作活動と政治的行為は世界を構築するため必要な活動を行うが、そのためには両者がどちらか一つの活動に解消されてはならない。アーレントは、文化的精神が制作活動と政治的行為という二つの活動を守ることによって世界の存続に貢献していると考えているのである。

ところがアーレントは文化も教育と同じように危機的状況に陥っているとみた。「文化の危機」が執筆された1950年代、大衆文化は広くゆきわたり、人々の関心の高まりが見られたが、アーレントにとってそれは、階級社会において見られたブルジョワ文化の俗物主義よりもはるかに絶望的な状況を生み出していると考えられた。俗物主義は、有用性という観点から文化対象物の価値をはかる。特に教養の多さに個人の威厳を求めるのが教養俗

物である。この俗物主義的な市民文化における文化対象物への見方は、作品それ自体の意味を無意味化させたが、事物の「客観的な性格」⁶⁸に手を加えるようなことはしなかった。しかし、大衆文化では『ピグマリオン』の結末がハッピーエンドへと書き換えられ、『マイ・フェア・レディ』として人気を博したように、作品を商品化するために作品の内容を変更するという事態が生じていた。このような事態においてアーレントは文化対象物の喪失を見たのである。

大衆文化における文化対象物の喪失は何によってもたらされたのだろうか。アーレントは文化の娯楽化にその理由を求める。アーレントによると、娯楽とは気晴らしのように、生命過程において必要とされるものであり、文化のように世界を構築するものではないという。大衆社会とは、文化ではなく娯楽を求める際限のない生成過程なのである。娯楽生産物は飽きられないように斬新さという基準において生産されたが、この終わりなき斬新さへの要求はついに文化対象物へと手を伸ばした。こうして大衆文化において娯楽と文化という区別は消失し、文化対象物は消費物となった。制作物が保護されなくなったのである。アーレントはこのような危機的状況を批判し、文化と娯楽の境界線の再構築が必要であるとす。

このようにアーレントは、教育だけでなく文化においても世界疎外の問題は深刻な状況を引き起こしているとみた。先述したように、アーレントは世界疎外の克服を政治的課題として見ていたが、『過去と未来の間』ではその問題を「教育の危機」と「文化の危機」として捉え、世界疎外に対抗する筋道を示唆した。それが、教育においては過去への態度の見直しであり、文化においては文化と娯楽の境界線の再構築である。

本節では制作物の保護における教育的意義を探求するために、文化的精神と、文化と娯楽の境界について論じた。これまで見てきたように、世界を気遣う文化的精神は、制作活動と政治的行為が互いに一線を超えないための判断能力として考えられていた。世界の存続という観点から見るとこの精神は、事物の保護に関与するだけでなく、世界の構築を支える役割も担っている。文化的精神のこれらの役割は公的世界の範囲を守る美への感受性によって成り立っている。アーレントの文化論は、文化的精神や美への感受性について古代の考えを参照したり、文化対象物の判断についてカントの美的判断能力論に依拠したりと、過去に倣う姿勢が見られる。だが、それは単に過去を保存するというのではなく、「世界」の中でその「アクチュアリティ」⁶⁹を引き出す試みなのであり、ここにアーレントの独自性が表れているのである。

おわりに

本稿は、教育者の役割である世界の存続を明らかにするため保守性と革新性の意味について検討を行った。先行研究では、アーレントの教育論における保守性は、世界を保護する教育者の保守的な態度に見られ、革新性は子どもの革命的な性格において捉えられてきた。そこで本稿では、世界の保護においてあまり注目されてこなかった制作物の保護を視野に入れ、保守性と革新性の意味を再検討し、世界の存続とはなにかについて考察を行った。

第1節では、アーレントの「世界」を明らかにするため『人間の条件』を参照し、世界の構築を担う政治的行為と制作活動の特性について論じた。アーレントにおいて世界は、人間事象を現前化する政治的行為と制作物を生み出す制作活動によって構築される人間領域を意味している。この世界を存続させるために制作活動と政治的行為は、世界に新たなものを付け加えるだけでなく、世界の安定化も担っている。アーレントによる子どもの革命的な性格の保護という主張は、世界に新たなものを付け加えるという考えに基づくものとして理解でき、世界の保護という主張は、世界の安定化という考えに繋がっていると見えるだろう。このようにアーレントの教育論における革新性と保守性は『人間の条件』において世界の更新と安定化という議論に対応していると考えられるのである。「教育の危機」でアーレントが問題としたことは、世界の安定化に対する責任の放棄が現代の教育者において見られたことである。アーレントはこの責任の放棄が権威の喪失と関連していると考え、その問題の深刻さを指摘し、教育的権威の起源へとさかのぼることで、教育者の過去に向き合う態度の重要性を主張した。

第2節では、過去に向き合うことを明らかにするために、『過去と未来の間』の「歴史の概念」と「序論」、そして『暗い時代の人々』の「ヴァルター・ベンヤミン」を参照した。「歴史の概念」でアーレントは、古代と近代における歴史概念の違いに着目しながら現代の歴史の特徴について論じることで、彼女自身による「歴史」概念の解釈を提示した。アーレントはこの取り組みを通して現代の歴史が、近代の歴史の特徴である際限なく広がる過去と未来という時間性や人類の不死性への関心を受け継いでいると考えた。本節ではこのアーレントによる歴史概念の解釈と1節で取り上げた世界の永続性をあわせて見ることで、アーレントも不死性への関心を持つことを確認した。だが、アーレントは永続性を古代の歴史—円環的時間—や、近代の歴史—過程—に見るのではなく、世代を超えて行われる政治的行為に見るという点で、

古代や近代とは異なる歴史概念を検討していた。「序論」と「ベンヤミン」論文では、過去に向き合うことが、これまで発見されてこなかった過去を救済し、公的世界の新たな側面を明らかにすることに繋げられ、論じられていることについて見てきた。2節では様々なアレントの文献を読解したことで、過去と向き合うことが、過去の保護に重きを置く保守主義とは異なり、公的世界を理解するため新たな過去を発見する保守的態度であることを明らかにした。

第3節では、過去の救済において制作物の保護をより詳細に見ていくために、「文化の危機」を参照した。「文化の危機」において制作物は過去の記憶を保管すると論じられ、制作物の保護が過去の保護であることを確認した。そして文化対象物の保護に関わる趣味判断能力は、あらゆる制作物から世界を構築する事物を選び、判断する能力として重要視されており、文化的精神は、世界を構築する政治的行為と制作活動における対立関係を維持する役割を持つと考えられていた。このとき趣味判断能力や文化的精神は、政治的行為や制作活動を支える役割として論じられ、安定した世界の構築に間接的に貢献すると考えられている。このようにアレントにおいて制作物の保護は、公的世界を構築することに繋げられ、その重要性が示されている。1節ではアレントの教育論の革新性が、世界に新たなものを付け加える政治的行為と制作活動において見られたが、アレントの文化論ではこれらの活動を支えるものとして文化対象物の保護が論じられていると言えるだろう。つまり制作物の保護は、それ自体は保守的な活動であるが、世界の更新にも間接的に関わっているのである。

このように議論を通してみると、アレント教育論において保守性は世界の安定化を指しており、革新性は世界の更新を意味している。アレントが教育者の役割として提示した世界の存続は、これら世界に新たなものを付け加える革新性と、世界の安定化という保守性が両立し、この両立が維持されることで果たされるのである。

最後に本研究の課題について述べておきたい。本稿は、「教育の危機」とその他のアレントの文献との関連性を示すことにとどめており、アレントが参照した哲学者たちとアレントとの思想的関係について検討することができなかった。また、カントやベンヤミン以外にも、例えばアレント研究者のハンセンは、アレントの大衆社会批判とアドルノの大衆社会批判との共通点について検討している⁷⁰。ハンセンの取り組みのように、アレントの独自性に関する研究は、アレントが直接言及していない哲学者との思想的関係も視野に入れて行われている。このような研究は、アレントが世界を存続す

るため革新性と保守性という二つの観点を取り入れた意図について、洞察を深めるための新たな視座を与えるだろう。この点については今後の課題としたい。

注

- 1) 本論中で参照する文献については、以下の略称を用いる。邦訳がある場合にはその頁数を〔 〕内に記載する。引用に関する訳語に関しては一部、訳語を変更している。
BPF: Hannah, A. (2006) *Between Past and Future*, Chicago Press. (引田隆也, 齋藤純一訳 (1954)『過去と未来の間』みすず書房).
HC: Hannah, A. (1958) *Human Condition*, Chicago Press. (志水速雄訳 (1994)『人間の条件』筑摩書房).『活動的生』は『人間の条件』のドイツ語訳であり、アレントが監修した著作である。この著作は1960年に発表されている。本稿では適宜、『活動的生』の邦訳を参照しているため、その際は、Va + 数字 + 頁 と表記している。
RJ: Hannah, A. (2003) *Responsibility and Judgment*, Schocken Books. (中山 元訳 (2016)『責任と判断』筑摩書房).
MDT: Hannah, A. (1970) *Men in Dark Times*, Harcourt Brace & Company. (阿部 齊訳 (2005)『暗い時代の人々』筑摩書房).
- 2) BPF, p. 182 [250頁].
- 3) Ibid., p. 189 [259頁].
- 4) Ibid., p. 191 [261-262頁].
- 5) 川崎修 (2014)『ハンナ・アレント』講談社, 402-404頁.
- 6) アレントが『過去と未来の間』の序文で提示した思考様式に対する教育的意義の発見はZakin (2017) *Between Two Betweens: Hannah Arendt and the Politics of Education*, *The Journal Of Speculative Philosophy*の研究でも見られる。
- 7) BPF, p. 183 [251頁].
- 8) 樋口は制作行為の担い手において自発性がいかに見られるかという点に着目している。
- 9) バーコヴィッツは古代ギリシアにおいて美的な判断がポリスの範囲内で行われていたことに着目し、子どもたちが公的世界において適切な革命的变化を引き起こすために美的判断能力が必要であると考えた。Berkowitz (2020) *Public Education: The Challenges of Educational Authority in a World without Authority*, *Hannah Arendt on Educational Thinking and Practice in Dark Times: Education for a World in Crisis*, pp.

- 20-21を参照。
- 10) アーレントとベンヤミンの思想研究は歴史哲学において行われている。代表的な研究としてEmerling (2009) *An art History of means: Arendt-Benjamin, Journal of Art Historiography*と、青木崇 (2022)「『真珠採り』の態度—ハイデガー・ベンヤミン・アーレント」『Heidegger-Forum』がある。一方で、教育分野において道徳教育の観点から趣味判断能力への関心が多くみられる。以下、Biesta (2016) *Reconciling ourselves to reality: Arendt, education and the challenge of being at home in the world, Journal of Educational Administration and History*. Korsgaard (2020) *Visiting exemplars. An Arendtian exploration of educational judgment, Ethics and Education*. Rodowick (2021) *An Education in Judgment : Hannah Arendt and the Humanities*を参照。
 - 11) RJ, p. 212 [387頁] .
 - 12) Ibid., p. 205 [377頁] .
 - 13) BPF, p. 185 [254頁] .
 - 14) RJ, p. 204 [375頁] .
 - 15) BPF, p. 189 [259頁] .
 - 16) HC, p. 55 [82頁] .
 - 17) Ibid., pp. 183-184 [298頁] .
 - 18) Ibid., p. 52 [79頁] .
 - 19) ヴィラ. 青木隆嘉訳 (2004)『アレントとハイデガー 政治的なものの運命』法政大学出版局, 160頁。
 - 20) Va, 232頁。
 - 21) HC, p. 97 [152頁] .
 - 22) Ibid., p. 155 [247頁] .
 - 23) Ibid., p. 236 [370頁] .
 - 24) BPF, p. 188 [258頁] .
 - 25) Ibid., p. 182 [250頁] .
 - 26) HC, p. 176 [287頁] .
 - 27) Ibid., pp. 178-179 [290-291頁] .
 - 28) Ibid., p. 178 [289頁] .
 - 29) RJ, p. 197 [365頁] .
 - 30) BPF, p. 185 [254頁] .
 - 31) HC, p. 191 [308頁] .
 - 32) Ibid., p. 184 [298頁] .
 - 33) Ibid., p. 191 [309頁] .
 - 34) Ibid., p. 238 [371頁] .
 - 35) BPF, pp. 186-187 [256頁] .
 - 36) Ibid., p. 121 [165頁] .
 - 37) Ibid., p. 121 [165頁] .
 - 38) Ibid., p. 75 [99頁] .
 - 39) Ibid., p. 64 [84頁] .
 - 40) Ibid., p. 57 [74頁] .
 - 41) Ibid., p. 58 [75頁] .
 - 42) Ibid., pp. 74-75 [99頁] .
 - 43) Ibid., p. 11 [12頁] .
 - 44) Ibid., p. 13 [14-15頁] .
 - 45) ベンヤミンの著作や文献からの引用はアーレントが引用しているものや彼女の言葉で言及しているものに沿って用いている。ベンヤミンの思想を理解するために本稿では、柿木伸之 (2019)『ヴァルター・ベンヤミン—闇を歩く批評』岩波書店を主に参照した。また、ヴィラ. 青木隆嘉訳 (2004)『アレントとハイデガー 政治的なものの運命』法政大学出版局は、ベンヤミンとアーレントの歴史的態度について論じながらアーレントの伝統に対する取り組みを解釈する視座を示している。ヴィラの著書に関しては11-15頁を参照。
 - 46) MDT, p. 193 [298頁] .
 - 47) ベンヤミン, W. 浅井健二郎訳 (1996)『ベンヤミン・コレクション 2』, 543頁。
 - 48) MDT, p. 164 [256-257頁] .
 - 49) ベンヤミン, W. 浅井健二郎訳 (1996)『ベンヤミン・コレクション 2』, 548頁。
 - 50) MDT, p. 166 [260頁] .
 - 51) Ibid., p. 205 [317頁] .
 - 52) Ibid., p. 197 [304頁] .
 - 53) ベンヤミン, W. 今村仁司, 三島憲一訳 (2003)『パサージュ論 2』, 9頁。
 - 54) MDT, p. 200 [309頁] . ベンヤミン, W. 今村仁司, 三島憲一訳 (2003)『パサージュ論 2』25頁において、ベンヤミンはこの収集家の考えが「古風な印象」を与えると述べている。
 - 55) BPF, p. 208 [286頁] .
 - 56) キケロ. 木村健治, 岩谷 智訳 (2002)『キケロー選集 12巻』岩波書店, 110頁。
 - 57) トュキュディデス. 久保正彰訳 (2020)『戦史』中央公論新社, 68頁。
 - 58) BPF, p. 210 [289頁] .
 - 59) 本稿ではアーレントのカント理解の妥当性について触れることはできない。このことに取り組んでいる文献としてRodowick (2021) *An Education in Judgment Hannah Arendt and the Humanities*がある。
 - 60) BPF, p. 219 [301頁] .
 - 61) Ibid., p. 219 [301頁] .
 - 62) Ibid., p. 64 [84頁] .

- 63) Ibid., p. 209 [287頁].
 64) Ibid., p. 199 [272頁].
 65) Ibid., p. 206 [283頁].
 66) Ibid., p. 215 [296頁].
 67) Ibid., p. 290 [401頁]. アーレントは例えばプファイファーの研究を通して、宗教世界における聖書の位置づけについてエラスムスが文学の重要性を説き、内的自由の獲得を考えていたと理解している。
 68) BPF, p. 202 [276頁].
 69) Ibid., p. 14 [16頁].
 70) Hansen (1993) *Hannah Arendt: Politics, History and Citizenship*, cp. 3を参照。

付記：

本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2136 の支援を受けたものです。

参考文献

【英語文献】

- Arendt, H. (1958) *Human Condition*, Chicago Press. (志水速雄訳 (1994)『人間の条件』筑摩書房。森 一郎訳 (2020)『活動的生』みすず書房).
 — (1970) *Men in Dark Times*, Harcourt Brace & Company. (阿部 齊訳 (2005)『暗い時代の人々』筑摩書房).
 — (2003) *Responsibility and Judgment*, Schocken Books. (中山 元訳 (2016)『責任と判断』筑摩書房).
 — (2006) *Between Past and Future*, Penguin Classics. (引田隆也, 齋藤純一訳 (1954)『過去と未来の間—政治思想への8試論』みすず書房).
 Berkowitz, R. (2020) Public Education: The Challenges of Educational Authority in a World without Authority, *Hannah Arendt on Educational Thinking and Practice in Dark Times: Education for a World in Crisis*, Bloomsbury Publishing.
 Biesta, G. (2016) Reconciling ourselves to reality: Arendt, education and the challenge of being at home in the world, *Journal of Educational Administration and History*, 48 (2).
 Emerling, J. (2009) An art History of means: Arendt-Benjamin. *Journal of Art Historiography*, (1).
 Gordon, M. (2001) Hannah Arendt on Authority: Conservatism in Education Reconsidered, *Hannah*

Arendt and Education: Renewing our Common World, Routledge.

- Hansen, P. (1993) *Hannah Arendt: Politics, History and Citizenship*, Polity Press.
 Korsgaard, M. (2020) Visiting exemplars. An Arendtian exploration of educational judgement, *Ethics and Education*, 15 (2):247-59.
 Rodowick, D. N. (2021) *An Education in Judgment. Hannah Arendt and the Humanities*, The University of Chicago Press.
 Zakin, E. (2017) Between Two Betweens: Hannah Arendt and the Politics of Education, *The Journal of Speculative Philosophy*, 31 (1):119-134.

【日本語文献】

- アレント, H. 志水速雄訳 (2019)『革命について』筑摩書房.
 青木 崇 (2022) 「真珠採り」の態度—ハイデガー・ベンヤミン・アレント」『Heidegger-Forum』16: 69-84.
 ヴィラ, D. 青木隆嘉訳 (2004)『アレントとハイデガー 政治的なものの運命』法政大学出版局.
 柿木伸之 (2019)『ヴァルター・ベンヤミン—闇を歩く 批評』岩波書店.
 川崎 修 (2010)『ハンナ・アレントの政治理論 アレント論集 I』岩波書店.
 — (2014)『ハンナ・アレント』講談社.
 カント, I. 篠田英雄訳 (1964)『判断力批判 上巻』岩波書店.
 キケロ. 木村健治, 岩谷 智訳 (2002)『キケロー選集 12巻』岩波書店.
 木村浩則 (2001)「アレント教育論における「保守」と「革新」—ハンナ・アレントの教育理解再考」『近代教育フォーラム』10: 249-62.
 田中智輝 (2017) 「「世界」の継承と更新に向けた「過去への態度」—H. アレントによる近代教育批判の時間的次元に着目して—」『教育哲学研究』116: 119-137.
 トュキュディデス. 久保正彰訳 (2020)『戦史』中央公論新社.
 樋口大夢 (2022) 「ハンナ・アレントにおける「自発性」の教育思想: 「世界」を刷新することと教育が「保守的」であることの間」『教育学研究』89 (1): 1-13.
 — ベンヤミン, W. 浅井健二郎訳 (1995)『ベンヤミン・

コレクション 1』筑摩書房.

- (1996) 浅井健二郎訳『ベンヤミン・コレクション
2』筑摩書房.
- (1999) 浅井健二郎訳『ドイツ悲劇の根源 上巻』
筑摩書房.
- (2003) 今村仁司, 三島憲一訳『パサージュ論 2』
岩波書店.

The continuance of the world in Hannah Arendt's Educational Thought : From the Perspectives of the "Conservativeness" and "Innovativeness"

Kanon YAMANAKA

Abstract

In this paper, I will argue for the continuance of the world as an educational role with historical and cultural perspectives in some essays from her book, *Between Past and Future*. With regard to the educational role, Arendt pointed out that the preservation of the public world, and the protection of the innovative character of children contributes to the permanence of the world. This public world has existed across generations through the political actions of mature people who care of the works and identities. Educators had taught this public world as it is and supported children to become political actors with their authority. However, in "The Crisis in Education", Arendt emphasized the break in the tradition in the modern world, then suggested rethinking the attitude of the past of educators to inherit the public world for the children without authority. Arendt's argument has been discussed in terms of her position as either Innovative or Conservative. The other essays, "The Crisis in Culture" and "The Concept of History" help us to grasp what makes the world permanent and how to understand past humanistic affairs and things. From this, we can take a deeper look at two characteristics, Innovativeness and Conservativeness.

Keywords : The public world, Education, Culture, The attitude of the past, The conservativeness, The innovativeness